

韓流熱風の【周縁作戦】

日本の田舎の人々に歓迎される韓国の芸能人たち

・・・緻密な日本側のスケジュールに比べ、韓国側の準備に物足りなさも

福島＝文・キム・スヒョン記者

写真・パク・スンファ記者

うねりくねった低い山脈の間に、手の行き届いた田畑が広がる日本の福島県。山の中腹を水平に切り出して作られた飛行場の平地が、とりわけ目立って見える。騒がしい韓日問題はどこ吹く風とばかりに静かに伏せていたこの場所に、5月5日、タレント、チェ・ブラム、チョン・ドンファン、チ・ソン、キム・ソヨン氏やモデルたちを乗せたチャーター機一台が到着した。

「韓日友情の年」を迎え、(社) ウェルカム・トゥ・コリア市民協議会(会長チェ・ブラム)と、うつくしま韓国文化交流事業実行委員会が共同で主催する【アンドレ・キム・ファッションショー】が5月7日、郡山市のビッグパレット・コンベンションセンターで開かれる予定になっている。

佐藤栄佐久知事の意味が大きな役割

東京から車で東北方面に2時間30分ほど走ると到着する、ここ福島は、主要産業は農業や工業で、そのほかにスキー場やゴルフ場、温泉などがいたるところにあるものの、格別の名勝地ではない。郡山市の書店、回転すし店、コンビニエンス・ストアなども大方が平屋というぐらいに閑散とした地方都市だ。県全体の人口が200万人余りにすぎないここで、韓流熱風の実体を確認できるのかは疑問だった。

だが、NHK交響楽団の韓国公演が無期延期され、島根県と慶尚北道の姉妹都市関係が断たれるという中であっても、佐藤栄佐久福島県知事の意味は固かった。「国家よりも、市民レベルでの交流がより重要だ」と語っている彼は、県内の警察やガードマンを総動員するという「安全アレルギー症」を示しつつ、文化の奥地に放置された県民たちのためのビッグイベントを成功させようとした。

交流の水路を開いたチェ・ブラム氏も「韓国ドラマを愛してくれる人々に恩返しをするのは重要なことだ。東京で同じことをやってもリアクションがない。【周縁作戦】を使うのだ」と語り、福島と関係を結んだ理由を説明した。

昨秋から準備されたこの催しの具体的なプログラムは、地元の新聞社、大学、経済団体、

市民団体が集まって作られた実行委員会で設計された。当初は一回の記者会見とファッションショーを念頭において5000万円の予算が策定されたが、スタートークショー、ミニ・ファッションショー、伝統舞踊の公演等催しの数が増えるとともに基金が追加され、結局、県庁職員の口から「わが人生で最大の日」という言葉が出てくるほどに規模の大きな草の根のイベントへと生まれ変わった。

地方での催しを可能にした決定的なハードウェアは、飛行場とコンベンションセンターだった。福島県に空港ができたのは、わずか十余年前の1993年。ソウル、上海への直行便が開設されたのは1999年だった。その後、2001年の福島未来博にチェ・ブラム会長が招待されて関係が始まり、全羅道、京畿道との交換訪問、パンソリ公演などが続いた。これに加えて収容人員3千人のコンベンションホールは、パリ、シドニー、カイロなど、大都市を中心に動いているアンドレ・キムを福島という見知らぬ「村」に招待することを可能にしたのだ。

緻密な組み立てのおかげで、韓国の芸能人たちは県庁の要望に合わせて適材適所に投入された。「第2のヨン様たちが記念撮影と茶道体験」（5月7日付「朝日新聞」地方版）、「【冬のソナタ】の出演者らがトーク」（5月7日付「福島民報」）など、「スターの記事化」を引き出す「あいさつ+写真撮影」というパッケージの日程が進められ、韓国の芸能人と福島県の接点は広がっていった。「韓流スターが立ち寄った温泉場」という高札が、明日すぐにかけられても不思議ではない雰囲気だった。

韓流スターは責任感を感じた

これに比べて、韓国芸能人たちの対応はいささか残念だった。文化、芸術界の民間外交団体が相手国の招請によって予算の支援を受けて催しを行うという点は肯定的だったけれども、細心の配慮が十分ではなかった。

日本側の実行委員長があいさつを韓国語で準備してきており、日本の女性たちは韓国のスターに会うというときめきに着物を着てトークショーやレセプションに来たというのに、韓国側は「こんにちは」を「こんばんは」と言ったチェ・ブラム氏の軽い失敗以外には相手国の言語を口にしたことはなく、これとって韓服をまとった芸能人もいなかった。

このような単純な比較以上に、幾人かの芸能人たちは6日夜のレセプション会場をさっさと抜け出してしまい、「熱烈なファン」を確保するチャンスを掴めない様子や、韓流スターのとりとめのない発言などは、大いに残念さを残した。

今回のイベントの主人公であるチ・ソン氏は「ヨン様でもないのにとっても喜んでくださり、責任を感じました。ファッションショーへの出演だけだと思ってやって来たのに、突

然さまざまなスケジュールが入って大変だったし、私はここで何をすべきなのかという思いに駆られました。日本のマスコミとのインタビューの際には韓国の広報を、もっと上手に出来たらよかったものを、ね。」と語った。

だが現実的に「歴史教科書」よりも強い力を持った「韓流スター」を国家の広報のレベルで企画することを所属会社や行事の主催団体に期待するのは難しい。だが7日にビッグパレット・コンベンションセンターで開かれた数々の催しは、韓日両者に大きな成果を残した。

【テージャングム】の試食コーナー、【冬のソナタ】に出演したチョン・ドンファン氏のサイン会などは盛況だったし、関連シンポジウムは極めて成功した。

基調講演を行ったチョ・ギュチョル韓国外語大教授は「芸能人を媒介にして興味を引き出し、シンポジウムに市民の参加を作り出した戦略が良い」と評価した。夕方のファッションショーは、福島県民に感動と興奮を残しながら無事に行われていった。

催しの準備に参加した、福島韓国語・韓国文化ネットワークのチョン・ヒョンシル代表は、「17年間東京で暮らした後、2000年に福島県に来て韓国語教室を開き、2～3人の申し込み者を期待していたところ、初日に15人が来たのよ。キムチをお隣のハルモニ（おばあさん）に差し上げたら、すぐさま近所の嫁・姑5組がやってきて、作り方を教えてくれと言われたほどに、それは実に良い反応でした」と語り、今回の催しにも会員150人が自発的にボランティアで活動している、と伝えた。

このような催しは、福島県に居住している在日同胞にとっても大きな励みとなる。白河市に住んでいるペク・スンオク氏（48）は「22歳のときからここで暮らしているが、このように大きな交流行事は初めてだ。民団では500～600万円の協賛金を拠出したし、また日本の方々にも見せてあげたくてファッションショーのチケットも譲ってあげた。在日の40代、50代の人々は差別を受けた覚えがあるがゆえに、今なお学校に子供らを送りながらも心配をしているのに、イメージを変えてくれたペ・ヨンジュンという俳優がいて、個人的には彼に感謝している」と語った。

会場の前に1台の車がやってきて、おとなしくデモをして消え去った以外には、特に右翼の動きもなかった。「互いに分かるようになり好きになれば、問題は解決できるのではないのか」という純粋な楽観論が、韓国文化に好奇心を見せている日本の庶民たちを支配していた。

習慣の交換？空杯を頭に振り払う日本人たち

「沢井さん、沢井さん、さあ一杯」

すべての日程が終わり、催しの関係者たちが集まった夜更け、福島県庁のある職員が、韓国式の爆弾酒を受けて飲んで「カラになった」という証に杯をひっくり返して頭の上で振る。

その場のどの韓国人も、そのようにはしなかったけれども、誰が飲酒文化の交流の最初のボタンをかけ間違えたのか、杯を受け継ぐ日本人ごとに、頭の上で杯を振り続ける。人と人の出会いにおいて、習慣や様式の交換があることを見せつけていた。歴史の書物には記録されない福島での交流の夜は次第に深まっていった。

P58 写真 5月6日、福島県・会津鶴ヶ城で開かれた記者会見。タレント・チ・ソン氏（向かって左側から5人目）とキム・ソヨン氏（同右側から5人目）のほかに多くの韓国の芸能人が同席した。

P59 写真 5月5日、福島空港で韓流スターを歓迎する日本人たち。5月7日に開かれた韓国衣装体験（真ん中）と韓流スター写真展も人気があった。

福島がアンドレ・キムにはまった日

神秘さとロマンチックさが映えた「ファッション・ドラマ」・・・

チ・ソンとキム・ソヨンの別れの演技に観客ら高潮

P60~61 写真 ①④華麗で柔らかい衣装が続くと、観客らは「キレイ」という感嘆詞を乱発した。

②衣装の着こなしが乱れてはいないか、全身を鏡に映してみるのモデルの基本だ。

③次の舞台のために素早く衣装を着替えて待機中のモデルたち。

⑤今回のショーの主人公として登場したチ・ソンとキム・ソヨン。彼らの別れの演技は、韓国ドラマを連想させた。

⑥大舞台の経験の多いプロ・モデルたちだが、ショーが始まるまでは緊張感を感じる。

⑦5月7日に開かれた福島県内のファッション専門学校の学生らのミニ・ファッションショー。アンドレ・キムが、簡単な審査評をしている。

紙吹雪が舞い始めると、舞台の後ろ側から真っ白の衣装をまとったモデルたちが軽快な足取りで登場する。

5月7日、日本の福島県郡山市のビッグパレット・コンベンションセンター。3000席をぎっしりと埋め尽くした日本人たちは、熱い拍手でアンドレ・キム・ファッションショーを歓迎した。今回の舞台には未来志向的で、アジア的神秘感とロマンティズムを強調

した衣装が全部で175点、お目見えした。ドラマ【オールイン】によって株価上昇中のタレント・チ・ソンが登場するたびに、至る所でカメラのフラッシュがたかれた。

ショーの前半部にキム・ボムスの【サランヘヨ＝愛しています】が流れると、この日の主人公、チ・ソンとキム・ソヨンが登場し、一編のドラマを披露した。「プロのモデルによって洗練された都会的雰囲気をつくり、演技者たちのドラマチックな感性によって芸術性を表現する」というアンドレ・キム・ファッションショーの基本コンセプトが忠実に反映された。

福島市から来た梅津アツコさん（38）は「数十枚を応募して、辛うじて当選した。韓国的な色彩が、とても美しい」と語り、満足感を表した。3000円を超える有料観覧料にもかかわらず、9000人以上の応募者が殺到し、別に抽選をしなければならなかった。

1962年から43年間活動しているアンドレ・キムにとってファッションショーは「総合芸術」だ。誇張された前衛性を警戒しつつ、現代的東洋美を披露する彼のショーには、普通の人々の文化的感興を引き出す興行的要素がある。

福島県民は、見知らぬ地方の町にやってきた韓国のデザイナーや韓流スター、そしてモデルたちに惜しめない拍手を送った。

（「ハンギョレ21」第560号、2005年
5月24日付より）